

を誘致したが、これが昭和34年以降大きく開花し、この巨大な核により豊田市域は著しく影響をうけ、今まで存在していた地方商業都市、農業地域としての性格がぬりつぶされようとしており、現在、いわゆる工業都市への過渡期的地域現象があらわされているといつてよい。

藤沢市御所見地区の地理学的考察

細谷陽子

御所見地区は藤沢市の西北部に位置し、相模野台地南西部の一部を占める農業地域であり、調査はこの地域の性格を農業から把握することを目的とした。

相模野台地は、多摩丘陵と相模川の間にひろがり相模湾に面している洪積世の台地で、第三紀の凝灰質砂岩からなる三浦層群の基盤の上に堆積した旧相模川の河成堆積物によってつくられ、台地表面は一面にローム層におおわれている。このローム層は場所により厚さが異なり、ローム層のちがいがから、台地面は、それぞれ下末吉面、武蔵野面、立川面に相当すると思われる3つの形成時の異なる面に区分され、これらの面の開析のちがい、ロームの厚さのちがいは土地利用にもある程度反映しているが、いずれも農業的土地利用が支配的である。

御所見地区は、人口約5,700人、世帯数1,023のうち農家が641戸（昭和38年）という地域で、産業別就業人口でも第一次産業（ここでは農業のみ）が60%近くを占めているが、兼業農家は53%位で年々増加の一途をたどっている。

古くから台地をさざむ沢山の小さな谷に面して谷戸集落ができていたが、中世以後、台地上にも集落ができ、江戸時代には現在を中心地となっている部分が小さな宿場町としての機能を果たした他は農業のみが行われていた。明治以降、高座那の中間部という位置、即ち鉄道線からはいずれも離れてはいるが、東海道線藤沢、平塚、小田急線長後、本厚木に出られることから、自給的色彩は濃かったが、蔬菜、養蚕などの商品生産もかなり行われてきた。しかしながらその農業経営の特色は陸稲・麦・甘藷に重点をおいた主穀作で、現在に至るまでこの傾向が強く、県内の湘南・三浦半島その他、商品化の進んだ地域と区別される。

農業面における本地域の後進性の一つの原因として甘藷のやみ売りという安易な形で比較的多くの現金収入を得てきたために農家が戦後、全国的に問

題にされた機械化、育畜化、共同化等を中心とした農業近代化に積極的にとりくまず、消極的に多角経営をとり入れて経営の合理化をはかろうとしたため、蔬菜栽培においては零細多種目栽培を主とし、酪農も小規模経営、養豚も豚小作が残存する位に零細なものがほとんどという形になったといえる。

ところで他地域におくれながらも昭和35、6年以後、農産物の商品化の一層の進展とともに農業経営においても新しい動きが見え始めた。それは小規模多角経営から専門的な経営への変化であり、酪農・養豚・養鶏・蔬菜栽培等の部門で規模も今までになく大きいものがあらわれるようになったことである。こうした変化をもたらしたものとして考えられるのは、一つには、陸稻・麦・甘藷中心では、生計を維持していくのが困難になってきたこと、次に労働力不足からの機械の導入が土地条件の改善をもたらした他、耕地の交換介合、集団化をも促進し専門的経営を可能にしたこと、第3に藤沢市北部地域の工業化に伴う道路の整備もあげられるが、農協の指導、資金貸付も大きく作用しているようである。

しかし農業におけるこのような動きは、全体からみたらごく一部の余裕のある農家に見られるもので、より大きな動きとして、兼業化、即ち、農業は片手間に自給作物を作るだけという農家の増加が目立っている。

藤沢市において本地域は、現在農業地域であり、また将来も農業地域として残るべく計画されている。しかしながら、農地の転用からみても宅地化、工場用地化する土地は年々増えており、藤沢市北部の工業的開発が進むとともに兼業機会も増大することになり、農家も、自給飯米を目的とし、農業に積極的でない層と、近くに新たに追加された市場をも目的とする近郊蔬菜、酪農等の商業的農業と行う層との差が大きくなっていくのではないかと思われる。

以上農業を中心に本地域の特色をまとめてみたが、台地の低位生産性と安易な主穀作への依存から昔ながらの農村地帯として残されていたこの御所見地区も、周辺の変化とともに内部からも変りつつあることを感じさせられた。

松本盆地中部扇状地の地理学的考察

長谷川喜久子

調査地域の設定理由は、郷里であること、扇状地に興味があったこと、フォッサマグナの西縁の断層崖下の扇状地という、ほぼ同条件下の数扇状地の